「レジスタンスに希望」：１０・７、ハマス、そしてパレスチナの武装党派の再検討

The Real News Network, ２０２３年１１月２２日
韓国人ディアスポラ作家パク・ジュヒョン（Ju-Hyun Park）によるパレスチナ人
アブダルジャワド・オマール（Abdaljawad Omar）へのインタビュー
脇浜義明訳、田中一弘・大賀英二補訳　＊脚注はすべて訳注

「パレスチナの抵抗を ISIS スタイルのテロリズムと同一視する物語は、単純な現実を曖昧にしている： パレスチナ人は希望に満ちた未来のために戦っており、ハマスや他の武装勢力は、ガザの荒廃から想像されるよりもはるかに多くのことを成し遂げている。」

ガザ地区のガザ・シティで反イスラエル軍事デモ行進中のハマスの軍事組織イズ・アルディン・アル・カッサム旅団のガンマンたち。
Photo by: Yousef Masoud/Majority World/Universal Images Group via Getty Images

１０月７日のハマスのアル・アクサ洪水で、ハマスは西洋社会とシオニスト社会の想像力の中で恐ろしい怪物へと膨れ上がった。思想や目的も多様なパレスチナの抵抗勢力はすべてハマスのイメージに還元されて、テロリスト集団とされた。パレスチナ人の抵抗はすべてテロとされ、パレスチナと連帯する人々はテロ支援者とされた。このようにパレスチナ人解放戦士を「冒涜的な怪物」に描くのは、パレスチナ人への抑圧の現実を歪めるばかりでなく、また、イスラエルの無茶苦茶な暴力を正当化するだけでなく、パレスチナを支援し、かつ共感する当たり前の言説や思想を取り締まる目的のためである。

西側社会の左翼の多くはこの圧力に屈服して、パレスチナ人の権利を抽象的に擁護する声を上げながら、パレスチナ人が解放を勝ち取るためにとる具体的な行動を拒否するという矛盾した道を歩

んでいる。様々なパレスチナ人の武装した抵抗グループの組織目的についての真面目な研究、すなわち彼らが闘う動機、彼らの政治的思想、そしてアル・アクサ洪水の戦略的展望から何を達成したのか、などを真剣に研究し議論することが犯罪視され、タブーとされている。そういう状況に鑑み、今日はパレスチナ人の抵抗闘争の複雑さとその展望を検討する出発点として、リアルニュースではパレスチナ人のアブダルジャワド・オマールにインタビューした。

アブダルジャワド・オマールは西岸地区ラマラに住む作家、研究者、講師で、博士課程に在籍する大学院生であり、ビルゼイト大学の哲学・文化研究部の非常勤講師である。

編集部ノート： オマール・インタビューのレコーディングが１１月１６日に終わった直後に、イスラエルは西岸地区ジェニンにある難民キャンプの病院への爆撃を始めた。翌日の１７日、アル・シファ（Al-Shifa）病院の病院長は、イスラエル軍が病院の発電装置を破壊したので、新生児集中治療処置室の保育器の３９人の未熟児が死亡したと発表した。１１月２１日には、部分的な捕虜の交換と４日間の停戦が発表された。

パク・ジュヒョン：リアル・ニュース・ネットワークへようこそ。私の名はパク・ジュヒョン、本日のホストを務めます。本題に入る前に、私たちリアルニュースのスタッフを代表して、お聞きの皆さんに感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。私たちは、ボルチモアからバングラデシュに至るまで、日常の人々の苦闘を取材する独立メディアであることを誇りに思っています。リアルニュースは完全な非営利企業です。企業からの寄付はなく、広告費も受け取りません。私たちの報道は、皆さんのようなリスナーによって支えられています。私たちの活動を気に入ってくださり、応援してくださる方は、ぜひ therealnews.com/donate にアクセスしてください。皆様のご寄付は、私たちにとって想像以上に大きな意味を持ちます。

今日はパレスチナが議題です。１０月７日以降、世界はイスラエルがガザ回廊に対して集団的懲罰というえげつない破壊攻撃を行っているのを恐怖の目で見ています。現時点で 4,000 人以上の子どもを含む 12,000 人以上が殺害されています。

このインタビューのレコーディングが行われた１１月１６日現在、ガザ北部で何とか動いていた病院はたった一つだけでした。イスラエルは大学、学校、難民キャンプ、製パン所、製粉所、漁船、水道施設、モスク、キリスト教教会、通信施設、家屋を爆撃しました。ガザの民間人住宅の半分以上が損傷を受け、４万軒の家が完全に破壊されました。現在 170 万人以上の人々がホームレスとなっています。この２日間で数千人の住民が避難しているガザで最大の病院であるアル・シファ病院をイスラエル軍が攻撃するのが目撃されました。病院は水、燃料、食糧、その他の基本的必需品が届かなくなったので、医師と病院職員は普通なら考えられないような決断を迫られました。麻酔なしで手術をしたり、患者を生命維持装置から外したり、新生児集中治療室の保育器の中から３９人の早産児を取り出して死なせてしまったのです。イスラエルのガザ攻撃は民間人と戦闘員の区別をまったくしません。

ジェノサイドと戦争犯罪非難の声が世界中に高まっていますが、イスラエルの政治家は平然としています。ベン・グヴィル国防大臣は、ガザでは第二のナクバが起きていると公然と言ってほくそ笑みました。イスラエルでの報道によれば、イスラエル政府はエジプトがガザ住民 200 万人を難民としてシナイ半島に受け入れれば、エジプトの IMF からの借金を帳消しにすると申し入れました。ガザから先住パレスチナ人を民族浄化するイスラエルの意図がこのことからはっきり読み取れます。イスラエルはハマス打倒の名目で虐殺行為を国際社会に対して正当化しています。攻撃して破壊した病院はハマスの秘密基地だったと言い、殺害した 42 人のジャーナリストはハマスのプロパガンディストだったと言い、国連難民救済機関の職員をハマスの秘密工作員だと非難してする有様です。しかも、このレトリックはそっくりそのまま米国の民主・共和両党の親イスラエル政治家のレトリックになっています。

民主・共和両党の政治家はイスラエルのジェノサイドを非難するアメリカ国内の人々を親ハマスと非難し、停戦要求を反ユダヤ主義でイスラエルの自衛権を侵すと非難します。また、大学キャンパスでパレスチナを支援する学生活動家を調査して弾圧せよと要求します。イスラエル政府の過激主義的な言葉を真似て、メディアはガザの戦いを「イスラエルとハマスの戦争」と言っているものを、イスラエル・ハマスの決死戦と言っています[1]。それゆえ、ハマスという脅威は、この紛争について国民がどう考えるかを促す上で、中心的な役割を果たしています。

ハマスという言葉がそのように重要であるにもかかわらず、政治家を含めてほとんどの米国人はパレスチナ人によるレジスタンスを構成する多くの武装党派の一つとしてハマスが何者なのか、何から生まれ、何を望み、パレスチナ政治でどういう役割を果たしているのかを、正確に言うことができません。それで、初歩的な入門として、本日アブダルジャワド・オマールに参加してもらいました。彼はラマラに住む作家、研究者で、博士課程の学生で、ビルゼイト大学（Birzeit University）哲学・文学部の非常勤講師です。アブダルジャワド、出演してくれてありがとう。

アブダルジャワド・オマール：お招きありがとうございます。

パク・ジュヒョン：リアル・ニュース・ネットワークの聴者にもう少し詳しく自己紹介してくれませんか。

アブダルジャワド・オマール：私は現在博士論文を書いているビルゼイト大学の学生で、論文はほぼ完成しています。ビルゼイト大学の哲学・文学部で非常勤講師もしていて、この大学の必修科目である西洋哲学とアラブ近代政治思想を担当しています。私は、研究者としてもパレスチナで生まれ育ったパレスチナ人としても、哲学的なレベルでの戦争への関心だけでなく、この紛争とその歴史、パレスチナ人抵抗運動とその形成に関心があります。私の博士論文のテーマも第一次・第二次インティファーダを通じてパレスチナ人抵抗勢力が形成されていった過程、およびその過程とイスラエル政治との相互作用の研究です。私はワシントンDCで勉強し、ヨーロッパに戻って一年間さらに勉強してきました。これが私の経歴の簡単な説明です。

パク・ジュヒョン：ありがとうございます。少し私から付け加えれば、あなたは「モンドワイス」（Mondoweiss）[2]や「エレクトロニック・インティファーダ」（Electronic Intifada）[3]に何度も寄稿しています。視聴者の皆さんには、ネットで「モンドワイス」や「エレクトロニック・インティファーダ」の彼の文章を検索して読むことを勧めます。現在の問題や過去パレスチナにあったことなどの本質を見抜く見事な論文です。

本日のトピックへ入る前にあなたが暮らしているラマラの状況を話してください。ガザのことはメディアでよく報道されていますが、イスラエル占領下の西岸地区では占領軍は危機に対してどう対応していますか。また、あなたは何を見てきましたか。

アブダルジャワド・オマール：はい。西岸地区でも、１０・７以降、イスラエルはパレスチナ人の大量逮捕などの弾圧政策を強化しています。先月一月だけで3000人のパレスチナ人が逮捕されました。逮捕という点では対イスラエル闘争の歴史の中で最大の弾圧です。それ以外にも分離壁と検問所をいっそう強化して、村、町、市を分離・孤立させています。検問所では身体検査や嫌がらせや女性への性的ハラスメントがより頻繁になり、それはニュースにもなりません。

一昨日イスラエル刑務所で刑期を終了したパレスチナ人３０人が釈放されましたが、イスラエルは彼らをラマラ郊外で全裸にして釈放するという嫌がらせを行ったのです。こんな嫌がらせが日常

---

[1] 米国の主流メディもそれを真似て「イスラエル・ハマス戦争」という言葉を使っている。そこには極悪非道のハマスという化け物退治の戦争というイメージを米国読者に植え付ける意図がある。

[2] 主に進歩的なユダヤ人の視点から、中東におけるアメリカの外交政策を取り上げることに専念したニュース・ウェブサイト。

[3] インターネットを通じてパレスチナの現状とパレスチナ問題に対する国際世論の関心を高めることを目的としたパレスチナの抵抗運動サイト。

的に行われています。それに、西岸地区北部では武装抵抗グループがいるとされる難民キャンプへの軍事行動を行っています。ジェニン難民キャンプやトゥルカレムのヌールシャムス難民キャンプに軍が侵入して数十人を殺害しました。この数週間で西岸地区では約２００人のパレスチナ人が殺されました。

パク・ジュヒョン：西岸地区に関する説明、ありがとうございました。本日のテーマへ移りましょう。まず、イスラエルの占領とそれへの抵抗に関して米国と西側世界で主流となっている一般的な考え方の検討から始めましょう。それは民主主義対テロリズムの戦争という考え方です。イスラエルが民主主義国でパレスチナ人武装抵抗グループをテロリストとする思想的枠組みです。この枠組みは正しいと思いますか？もしそうでないとすれば、それはなぜですか？
アブダルジャワド・オマール：この思想的枠組みは政治的に作られたものです。イスラエルに対して親近感を持たせ、パレスチナ人に対して嫌悪感と倫理的怒りを持たせる仕組みです。パレスチナにある現実の構造を反転する策謀です。つまり、自由の篝火と民主主義国家が、価値観や文化やアイデンティティが異なるという理由以外には何の理由もなく、パレスチナ人から攻撃されているという構図です。この構図はイスラエルでは肯定的に捉えられていますが、実際にはシオニストがパレスチナで運動を始めた 134 年前からパレスチナ人はそれに抵抗してきました。誰かがやってきて腕力で自分たちの土地を奪っているのに抵抗するのは、ごく当たり前の反応です。
　だから抵抗は、暴力で土地を奪われ追い出されたこと、民族浄化に対する当たりまえの自然な反応で、それは長い間続き、例えばシオニストが５００以上のパレスチナ人が住む村を破壊した１９４８年、そして現在ガザで進行している紛争に強く現れたのです。パレスチナ人は自分たちの生存を守ろうとしているのです。それは生存のための戦いであって、価値観の違い、文化の違い、宗教の違いによる紛争ではありません。パレスチナ全土をユダヤ人の国にしたいイスラエルにとって、パレスチナ人の存在そのものが邪魔なのです。
　だからイスラエルは絶えずパレスチナ人を封じ込め、パレスチナ人の行動を制限し、最終的には消滅させる方法を考えてきました。あなたが冒頭に述べられたイスラエル政界における極右勢力、例えばベザエル・スモトリッチ（Bezalel Smotrich）やベン・グヴィルなどの狂信的宗教シオニスト[4]は、決定的な民族浄化計画を語っています。その計画はパレスチナ人を再びホームレスにし、難民にすること、つまり西岸地区とガザ回廊から民族浄化して、歴史的パレスチナの地をすべてユダヤ人国家にする計画です。イスラエルの市民権を持つパレスチナ人も民族浄化の対象だと、極右政党が言っています。パレスチナ人の抵抗はそういう民族浄化から、何十年と続いてきた虐殺から自分たちを守るための戦いです。

パク・ジュヒョン：このインタビューを聴いている多くの人は、あなたが間違いだと言った考え方を、すなわちハマスに代表されるパレスチナの抵抗グループの目的はユダ人殲滅、この地での平和的共存を否定する政治思想を推進しているという支配的な言説を絶えず聞かされてきました。リスナーがひょっとしたら持っているかもしれない疑念を払う真実を話してください。抵抗グループは政治的に何を実現したいのですか。どういうビジョンで闘っているのですか。抵抗グループは一つだけではありませんが、特に説明したいグループがあれば、それについて話してくださってもかまいません。
アブダルジャワド・オマール：歴史的にはパレスチナ人は様々な政治的計画を提案してきました。あなたがおっしゃる通り、抵抗勢力は一つではなく、たくさんあります[5]。それぞれ未来の展望、思

---

[4] スモトリッチはネタニヤフ現政権の財務相であり、ベン・グヴィルは警察相を務めている。
[5] 現在イスラエル軍と戦闘しているのは、イッズディーン・アル・カッサム旅団（Izz ad-Din al-Qassam Brigades）、アル・クッズ旅団（Al-Quds Brigades）、アブ・アリ・ムスターファ旅団

想、イデオロギー的傾向、最終的に何を実現したいかについて異なっています。しかし、いずれも、私が述べたパレスチナ人の生存を守るという点では一致していて、これが最も大切な点です。パレスチナにはスムード（Sumud）というアラビア語があります。不動の精神という意味です。絶対に尻尾をまかない、必ず故郷へ帰る、ということです。だからレジスタンスは、積極的攻撃、例えば何かを奪い取りたいという性格ではなく、イスラエルの行動に対する反抗、占領と入植者植民地主義（settler colonialism）に対する反抗なのです。

要するに、パレスチナを存続させるという自衛姿勢なのです。様々な抵抗組織がありますが、今述べた特徴が共通分母です。歴史的にパレスチナが提示した解決プロジェクトはいろいろあります。例えば、イスラエルが１９６７年に占領地とした１９６７年国境と呼ばれるところ、つまり西岸地区とガザにパレスチナ国家を樹立する二国家解決案を主張するパレスチナ人がいます。ハマスもその一部で、それをハマスの政治的目的だと公式に宣言しています。ガザ地区および西岸地区が中心となるパレスチナ独立国家を建設するというシナリオです。ハマスが公然と宣言しているのは、西岸地区における違法入植地の撤去とパレスチナ国家の建設、つまり、交渉を通じて２つの国家が異なる領域で並存するということです。

歴史的に言うと、もう一つ、民主的かつ世俗的な一国家をという案もあります。それは、ヨルダン川から地中海までの地にイスラエルのユダヤ人、パレスチナのアラブ人キリスト教徒とイスラム教徒、その他その地に住むすべての人々が、単一国家、あるいはイスラエル人とパレスチナ人の二民族国家、あるいは連邦制など、可能な形で一つの領土で共に暮らす案です。この二つの案以外にも他の解決策もあり得るかもしれません。

二国だろうが一国だろうが、大切なことはパレスチナ人が人権を持つ人間として全面的に認められることです。抵抗闘争はそれを認めさせようとする闘いなのです。それを実現すべき政治目的として抵抗していると、一般的には言われています。決して、パレスチナを占領しているのがユダヤ人だから抵抗しているのではありません。私が言わんとしているのは、パレスチナ人は反ユダヤ主義感情を持っていないし、反ユダヤ主義を動機として占領に抵抗しているのではないということです。ユダヤ人に対してではなく、占領それ自体に反対しているのです。どういう民族がパレスチナを占領したか、パレスチナへ入植し、先住パレスチナ人を殺し、追放して入植地を広げていったのは誰かということは主要な問題ではありません。もしウクライナ人がパレスチナに入植したとしても、ロシア人がそうしたとしても、いや恐竜がパレスチナを奪おうとしても、パレスチナ人は闘います。暴力で土地を奪い、生活と生存を破壊する者たちと闘うのであって、ユダヤ人が相手だから闘うのではありません。この点がここでの大きな論点なのです。

レジスタンスはユダヤ人世界に向けたものではありません。ただ、イスラエルがユダヤ人世界、ユダヤ教を代表していると宣言し、イスラエルの誰に尋ねるかにもよりますが、自らをユダヤ人の国だと宣言しているのです。しかもヨーロッパ、西側世界には恐ろしい反ユダヤ主義の歴史、ホロコーストに至った戦慄する歴史があり、それがパレスチナに持ち込まれて、事態を複雑にしているのです。しかし、我々パレスチナ人は我々を被植民地人にし、占領し、投獄しているのがユダヤ人だから闘っているのではなく、植民地主義、占領、投獄に対して闘っているのです[6]。

パク・ジュヒョン：あなたは二国家解決案と一国家解決案の問題に触れましたね。こういう最終的解決に関する最近の動向に関して説明をしてくれますか。ハマス以前はパレスチナ人のレジスタンスの中心であった PLO(パレスチナ解放機構)が米国仲介でイスラエルとの間で 1993 年にオスロ合

（Abu Ali Mustafa Brigades）、ムジャヒディーン旅団（Mujahideen Brigades）、その他検問所突破でイスラエル側へなだれ込んだパレスチナ人、及びガザ以外でイスラエルと闘っているヒズボラ(Hezbollah)やアンサール・アッラー（Ansar Allah,
フーシ派）など。

意を結びました。これは将来パレスチナ国家が最終的に誕生するための合意を確立するものでした。オスロ合意以降に何が起きて、オスロ合意以前の武装抵抗へ戻ったのですか。

アブダルジャワド・オマール：オスロ合意調印から２０～３０年の間にいろいろなことが起きました。オスロ合意の最大の問題は入植地拡大をやめるという約束がなかったことです。２００５年以前にはガザにも入植地が存在していました。２００５年にシャロンが西岸地区への入植を強化するためにガザから入植地を撤退する政策を取りました。その一方で和平交渉を維持しながら、他方で入植地を建設してパレスチナ人の土地を浸食していったのです。

だから、和平交渉で実現したいパレスチナ国家樹立のための土地がどんどん小さくなっていったのです。それに和平交渉とは名ばかりで、仲介役の米国が誠実な仲介者ではなく、一方的にイスラエル側に立つので、PLO は妥協を迫られるばかりでした。PLO は交渉の場にいるという立場を守るだけで精一杯で、米国とイスラエルが持ち出す認識の枠組み（パラダイム）を飲むばかりでした。その結果、実際に平和につながるプロセスという枠組みも吹き飛んでしまったのです。

一方、パレスチナ社会の中には、さまざまな理由からオスロ合意は自分たちが置かれている政治的苦境を解決する現実的な希望を見いだせないとして反対する声がありました[6]。その中にはイデオロギー的なものもあります。１９４８年以来の難民をすべて帰還させ、1 つの国家、1 つの世俗的な民主主義国家を誕生させることでしか、真の正義は得られないと考える人もいれば、１９４８年に家や村から追い出されたパレスチナ人が、現在のイスラエルに帰還することを求める人もいます。他のパレスチナ人たちは、二国家解決策を完璧なものではないが、何とかなる、あるいは現実的に手に入れられるものであり、その中で自分たちの政治的自己決定ができる国家を持てるものだと考えています[7]。

つまり、オスロ合意に関してパレスチナ社会が一致していたわけではなかったのです。オスロ合意をパレスチナの大義への裏切りだと見る意見が、特に活動家の間に多かったのです。事実、オスロ合意（1993 年）の後、パレスチナ人の生活はよくなるどころか、ますます苦しくなりました。行動の自由、水源、農業、経済、その他の面で過去３０年間において何らの改善もなく、一方入植地はどんどん拡大し、分離壁や検問所の増加などで、パレスチナ社会はバラバラに分断されました。ついに、民衆の怒りが爆発し、２０００年に第二次インティファーダと呼ばれるパレスチナ人とイスラエルの武力衝突が起き、２００５年から２００６年まで続きました。

２００５年にシャロンはガザからの撤退政策を実施しましたが、その分西岸地区への入植活動を強化しました。西岸地区では、オスロ合意で誕生した PLO が支配する自治政府（PA）が新しい政治的プロジェクトを立ち上げました。国家建設の下準備として将来の国家機能を担う制度や機関を作ろうとしたのです。これは、IMF、世界銀行、米国政治家、イスラエル政治家から、「パレスチナ人は国家機能に必要な制度も機関も持っていないので、国家建設は無理だ」と言われたから、その準備に着手したのです。

---

[6] オスロ合意について、第一次インティファーダに手を焼いたイスラエルが、特にリベラル派が中心となって、融和ジェスチュアとしての懐柔策であり、本当にパレスチナと和解するものではないし、イスラエルがパレスチナ国樹立を承認するはずがないという反対論があった。有名なエドワード・サイードも反対した。

[7] 二国家解決案は難民の帰還権を認めないので、１９４８年の難民が全部帰還できる一国家案、民主主義的で世俗的一国家案を唱える思想が出てきた。難民帰還権、今イスラエル国となっている故郷へ難民が帰ることができる解決を求める声があった。それに二国家解決案をイスラエルの属国、バンツースタンのパレスチナ国を作るだけだと反対し、本当にパレスチナ人自身が管理し主体的に自治できる共同体を提案する人々もいた。例えば、アラブの春で民衆が反対したような国家を作るのは何の意味もない。それより人権、自由、平等、民主主義を実現すべきだとする文化運動が、ジェニン難民キャンプの中にある。

当時PAの首相を務めていたサラーム・ファイヤド（Salaam Fayyad）（や現在PA大統領であるマフムード・アッバース（Mahmoud Abbas）がこの機構整備に精を出しました。機構や制度がしっかり整えば、国家を樹立し、二国家併存枠組みの中で独立国家としての役割を果たせると考えたのです。その努力の結果、２０１２年、IMF、世界銀行、EU、その他の国際機関が、PAは機構整備に成功したという報告書を発表し、パレスチナは国家樹立の用意が出来たと宣言しました。この２０１２年は、ガザとイスラエルの２週間にわたる衝突を除けば、レジスタンスが少なく、イスラエル人の死者は一人もいなかった珍しい年でした。

これは、確か１９７２年以来の３０年ぶりのことでした。つまり、暴力が緩和された時期だったのです。PAの機構整備を国際社会が評価し、その中に希望らしいものが見えたからでしょう。しかし、残念なことに、そこから何も生じませんでした。真摯な交渉も、当時オバマ政権だった米国政府からの真剣な仲介も約束もありませんでした。当時イスラエルは今と同じネタニヤフが首相となり、強硬路線を取りました。彼はパレスチナ国家樹立を認める気はなく、二国家解決案に関心がありませんでした。彼にとってパレスチナなんか存在しないのです。

当時いろいろな記事が書かれましたが、その中に、国連安保理のイスラエル大使だったダニー・ダノン（Danny Danon）が「パレスチナ人を降伏させることの何処が悪いというのだ」と発言したというものがありました。この言葉が意味しているのは、パレスチナ人国家なんか必要ではないということです。パレスチナ人は敗北した弱者で、国家を持つに値しない。西岸地区に我々が入植地を建設するのは不当だからやめろという声があるが、勝者の我々が何故やめなければならないのか。抵抗するテロリストを捕らえて軍事裁判にかけたり、必要に応じて行政拘留したり、秘密の諜報活動をするのを、何故やめなければならないのかと、言っているのです。実際、占領下のパレスチナでは理由もない逮捕と拘留がずっと続いています。半年ごとにそのような措置が更新されるために、何か月も刑務所に入れられ、裁判もないし、何の罪かも告げられないし、もちろん弁護士もつかない無茶苦茶なことが罷り通っているのです。ダノンはそれを勝者の権利だとうそぶいて、パレスチナ人は敗北を認めよと言っているのです。

イスラエルは平然とパレスチナ国家の樹立なんかさせないと宣言しました。これは、オスロ合意以降の和平交渉に全面的に依存する政治路線に賭けていたパレスチナ人社会にとって大打撃でした。パレスチナ人社会は考えを改める必要に迫られました。「どうしたらよいのだ？これから何ができるのだろうか？」と人々は戸惑いました。このオスロ合意の欺瞞が明確となり、和平交渉が問題解決にならないことが、パレスチナ側の暴力による抵抗、イスラエル側の軍国主義的傾向への道を拓いたのです。それに政治的にパレスチナは国際社会から忘れ去られた感じになりました。パレスチナは取るに足らん問題と扱われるようになっていました。米国で政権に就いたバイデンにとってパレスチナ問題は存在しないも同然でした。バイデンはイスラエル・パレスチナ紛争にまったく関心を示さなかった唯一の大統領でした。これは非常に重要な点です。

それが、１０月７日にすべてが変わったのです。突然に、パレスチナがもっとも差し迫った問題となったのです。突然世界中の人々がパレスチナを議論するようになりました。主要課題となりました。その理由の一部は、パレスチナ外交を無視し、約束を破り、交渉や外交による解決がないとパレスチナ人から希望を奪ってしまい、その結果、西岸地区やガザを問わずパレスチナ人が武装抵抗へ向かったからなのです。これは過去１０年間の欧米とイスラエルの集団的失敗をはっきり表わすものです。

パク・ジュヒョン：ありがとうございます。では、ハマスの１０月７日のアル・アクサ洪水と言われる作戦行動後の現在の軍事状況に話しを移しましょう。あなたはアル・アクサ洪水の目標は何だとおもいますか？ハマスやハマスを含む広いパレスチナ人のレジスタンスの戦略目標という点では、何が達成されたのでしょう？

アブダルジャワド・オマール：具体的目標があったと思います。パレスチナ人家族を悩ませている問題は親族や友人が政治犯として逮捕され、又は何の理由もなく行政拘留としてイスラエル刑務所

に入れられ、長い間苛酷な状況で苦しんでいることです。殴打、尋問、拷問、その他様々なハラスメントを受けています。政治的指導者だけでなく、子どもも逮捕されて入牢していています。電話で家族と連絡を取ることも許されていません。１０・７作戦の目標はこれらイスラエルに捕らえられているパレスチナ人を救い出すテコを見つけることだったと、私は思っています。それが大きな目標だったと思います。だから、イスラエル兵やイスラエル民間人を多く捕虜にとってガザに連れてきたのです。過去に度々あったように、捕虜交換の人質を多くとったのです。過去には、パレスチナ抵抗組織やレバノン抵抗組織とイスラエル政府のあいだで、捕虜にしたイスラエル兵とパレスチナ囚人との交換が行われたことがありました。それがアル・アクサ洪水の目標の一つでした。

第二の目標は、先ほど言ったように、国際社会の目をパレスチナに向けさせることでした。米国とイスラエルは、「パレスチナ問題は取るに足らない問題で、経済援助かイスラエルとパレスチナ人（PA）の管理と協力で対処できる些細な治安問題にすぎない。従順でないハマスはイスラエル軍事力で抑えることができる」と言っていました。そのような思い込みがあったのです。この作戦の狙いのひとつは、外交的、政治的、戦略的に、アメリカの政権や政治・外交当局、さらにはイスラエルの政策立案者たちの間にも存在する、パレスチナは取るに足らない問題だという全体的な物語を壊すことだったと思います。それが、パレスチナのレジスタンスがこの作戦を行った理由の第二だと思います。これがアル・アクサ洪水の目標の二つ目です。

第三の目標はガザに関することです。ガザに新しい状況を作り出すこと、封鎖のないガザ、もっと経済支援があるガザ、ガザの人々が自分たちの資源、自分たちの経済インフラ、例えばガザの沖合の天然ガス資源などを自らの管理下に置く状況を作り出すことです。世界最大の野外刑務所―多くの人々がガザをこのように描いています―に２３０万人の人間が、他の人々が享受している権利の多くを持たず、貧困の中で暮らしている状況を世界に見せて、それから脱却しようという試みなのです。経済的生活という点ではガザよりも西岸地区の人々の方がすこしマシです。西岸地区の PA はイスラエルやアメリカに協力的なのにガザのハマスは敵対的なので、経済援助も少ないのです。ガザの実情に国際社会の目を向けさせることが、少なくとも政治的なレベルでは、第三の目標でした。

パク・ジュヒョン：ありがとうございます。つまり、捕虜交換という側面があり、イスラエルの軍事的無敵性というイメージを破って、パレスチナ問題が緊急の問題だということを国際社会に思い出せ、ガザの非人間的状態を抵抗という形で世界に訴える側面もあったのですね。私たちは、今日起きている現実を見つめ、それを視聴者の皆さんに理解していただきたいと願っています。では、その後の展開について話してください。

あなたは「モンドワイス」のウェブサイトに、「ガザは今を生きている。自分自身と同時代的である。もう戦争を終えてもよいと切望している。何故なら、入植者植民地主義の病理心臓部で神と見なされていた複合体に見事に大恥をかかせたと言う意味で、戦いに勝利したからである。米帝国が慌てて中東へ走ってきて、イスラエルの神的複合体を取り戻させようと何度も何度も支援せざるを得なくしたという意味で勝利したからである。欧米のイスラエル・ロビーが、地域的に見ても国際的に見ても、パレスチナは問題じゃないと世界に喚き散らし、自分で自分をつまらないわめき屋みたいな存在にしたという意味で、勝利したからである。パレスチナ人の囚人をイスラエルの牢獄地獄から解放したという意味で、勝利したからである。小さな封鎖された都市が中東を神経質にさせ、全面戦争の瀬戸際を思わせて、イスラエルを狂気にさせたのだ。今やパレスチナは世界中で生きている」と書きました。怒りで狂ったイスラエルがガザに無差別虐殺と破壊を行っているのを見て、この作戦が勝利したとするのはおかしいと言う人々もいるでしょう。あなたはそういう人々に何と言いますか。

アブダルジャワド・オマール：もちろん、ガザの人々が毎日爆撃され、空から無差別射撃され、戦車やドローンや大砲で殺されるのを見るのはたまらなく辛いことですし、特にガザの人々にとっては無差別攻撃の下で生活しているのだから、日々恐怖に脅かされていることだと思います。しかし、

入植者植民地主義者や帝国との解放戦争を行うとき、ベトナムやアルジェリアやその他の多くの地で見られたように、流血という点ではいつも被抑圧者は大きな犠牲を払ったのは歴史的事実です。アルジェリアは祖国解放のために２００万人の犠牲者を出しました。ベトナムは米国人をベトナムから追い出すために４００万人の犠牲者を出しました。

自由を取り戻すためには被抑圧者はいつも大量の血を流し、巨大な金銭的・物理的犠牲を払わなければならないのです。武装抵抗は一つのシナリオです。なぜならば抵抗せずに沈黙するならば、ゆっくりと死んでいく道を選ぶことになるからです。強烈な流血の死ではないけれども、やはり殺されるのです。西岸地区やガザやそのほかの地域で起きているような状況の中で生きていることを説明するのはとても難しいことです。ガザや西岸地区やその他難民キャンプの生活には、闘いがなければ何の展望もありません。自分で自分を否定するか、他者によって否定されるか、イスラエルの戦争マシーンによって否定されるだけなのです。この否定はゆっくりとですが、毎日起きています。

毎日殺害や逮捕や土地収奪が起きています。ラマラ付近の入植地はどんどん土地を吸収して膨れ上がっています。このじわじわとパレスチナ人を殺すプロセスは国際社会のニュースになりません。入植地が拡大しパレスチナ人の生活空間が縮小しているのです。そしてイスラエルの政治家や軍人が決定的計画を公然と語っています。それは、ガザ、そして西岸地区で我々パレスチナ人を殺害または追放するために途方もない集中的暴力を伴うものなのです。私は、現時点のイスラエルの爆撃やパレスチナ人殺害、その多くの被害者が民間人や子どもや女性である殺害は、ある意味ではイスラエルの脆弱性の表れだと考えています。

パレスチナ人をまたもや大量殺戮することによって、パレスチナ人があらゆるところで生きて活動しているという見方を潰そうとしているのです。イスラエルにとって、パレスチナ人とパレスチナ人支援者の活発な活動が酷く目障りで、それを否定またはそれに仕返しがしたいのです。それを実現させないかどうかは、パレスチナの人々と彼らの支援者にかかっています。私が思うに、いくらパレスチナ人を殺しても、迫害され殺害されればされるほど、パレスチナ人は敗北するどころか、ますます解放闘争へ向かうのです。少なくとも世界の標準となっている程度の人間的尊厳のある生活ができるような解決を求めているのです。だから、イスラエルは破壊の大きさや殺害数の多寡によっては政治的勝利を獲得できないのです。イスラエルは死と破壊と戦争と暴力だけで紛争を考えているようですが、我々はそんな考えに泥濘する必要はありません。

私は、このような事態は人間の最悪の側面だと常に思います。今、イスラエルは当初の劣勢を挽回し、ジェノサイドを宣言してそれを実際に実行し、民族浄化を行って、支配力を打ち立てようとしていますが、ガザのレジスタンス鎮圧に成功していません。住居やインフラを破壊し民間人を大量殺害していますが、ハマスやイスラム聖戦やその他の抵抗グループの闘志を失わせるまでには至っていません。壊滅を宣言していますが、レジスタンスの壊滅にも至っていません。もちろん、軍事的な敗北は常にありえます。しかし、現在我々が苦しみ恐怖しているけれども、それは破壊と死滅をもたらす基準となるものではなく、希望を秘めた病理基準（hopeful pathology）なのです。

パク・ジュヒョン：１０・７攻撃の特徴について何点が話してくださいましたが、１０・７攻撃ではイスラエル民間人を殺害したことが、パレスチナを支援する人々の間でも問題視する意見があります。あなたが述べられた文脈の中でこれをどのように理解すればよいのか、リスナーに説明してくれませんか。

アブダルジャワド・オマール：パレスチナ戦士に関して現在蔓延している言説、少なくとも西側の主流メディアが描くイメージは、野蛮で、忌まわしい、嫌悪すべき、残忍な像で、何をしようと、あるいはしなくても、それは道徳的に、政治的に、その他の文明に照らしても否定すべきだ、というものです。こう言ったからといって、１０月７日にガザの包囲網を突破して入植地やキブツに入

った戦士が民間人を殺していないと言っているのではありません。民間人殺害はありました[8]。私はその事実を否定しようというのではありません。しかし、この種の言説には、イスラエルの煽情的なデマ、例えばハマスが幼児の首をはねたというデマがあることに注意する必要があります。さすがに幼児の首はねのデマは西側新聞が後にデマだと訂正報道しましたが。

センセーショナルで異常なものはたいていデマです。事実報道ではなく、何故デマを流すのでしょう。戦争という恐ろしい現実があるのにそれ以上に恐ろしいデマを何故作り出すのでしょう。それは別の物語を生みだすことになるからです。バイデン大統領もホワイトハウスの演説でこういうデマを発表し、後で取り消しました。そういうデマに踊らされないことが大切です。

本来は自分の村であったイスラエル領へ侵入してレジスタンスを行うためには、頑丈で警戒厳重な壁を乗り越えなければなりません。世界最強の諜報体制の裏をかく戦略が練られなければなりません。２４時間監視しているカメラやセンサーの裏をかいて領内に侵入し、同じく世界最強のイスラエル軍や警察と交戦するのです。軍事的論理で言えば、戦闘員のほとんどはこれらの目標に集中していました。軍事的に見て非常に困難なことを、アル・アクサ洪水は成し遂げたのです。だからイスラエルはイスラエル兵約４７０人の死者と、ガザ周辺地域の基地、警察署、諜報機関施設の破壊を認めたのです[9]。

ガザを包囲する防御集落に侵入した戦士はそこで軍や警察と交戦しました。そして民間施設、キブツや入植地を占拠し、民間人を後に捕虜交換に使うための人質にすることで、パレスチナの戦闘員はイスラエル軍による占拠地奪回を長引かせようとしました。イスラエル側は一刻も早く奪回するために、激しい攻撃をかけたので、その流れ弾で人質が多く犠牲になったようです。繰り返しますが、そうはいっても、他の場所でパレスチナの戦闘員がイスラエルの民間人を処刑していなかったとか、そういうことをしていなかったということではありません。私が言いたいのは、この犠牲者数は、双方による激しい銃撃戦[10]という要素や、イスラエル社会が非常に特殊であるという第三の要素も物語っているということです。

繰り返しになりますが、だからといって民間人を合法的に標的とすることができるとは誰にも理解してほしくありません。しかし、リスナーの方に分かってもらいたいのは、イスラエル民間人と言いますが、イスラエル民間人も半軍人であるというイスラエル社会の特殊な仕組みです。ガザ周辺地区の住民は武器を支給され軍から訓練を受けています。自衛できる半軍人であり半警官なのです。パレスチナ戦士はそのことを知って攻撃したのです。軍隊であろうとなかろうと、どの組織も行っているであろう方針、つまり、多くの場合、軍事的な訓練や経歴を持つ健常者（警察も軍事的な訓練や経歴を持ち、自衛することができる）には、いかなるチャンスも与えないということです。無抵抗な民間人殺害ではなく、もう少し複雑なのです。

西側メディアはその複雑さを報道しません。軍事基地が狙われたこと、イスラエル兵がどのように退去したか、あるいは何人が急いで退去したか、あるいは何人が殺されたか誘拐されたか、こういったことは報道されないのです。ハマスはイスラエルの戦闘員を集中的に狙っていました。二つ目の要素は、今説明したように、必ずしもパレスチナの戦闘員たちが部屋から部屋へと侵入し、目

---

[8] ユダヤ人民間人だけでなく、イスラエル内パレスチナ人も犠牲になった。また、イスラエル側の攻撃で犠牲になったイスラエル人もいる。ガザ近くのキブツや村はイスラエルがパレスチナ人の帰還を防ぐ人間の壁として政策的に作られた面もあり、この種の犠牲はシナリオの一部である。

[9] ガザ市街戦ではメディアはイスラエルの圧倒的掃討を報道しているが、救急ヘリコプターが絶え間なく病院とガザ市内を往復していることから、イスラエル軍にもかなりの死傷者が出ている模様という報道がある。

[10] イスラエルは自国軍が自国民の犠牲を前提にした攻撃を行ったことを隠すために、パレスチナ戦士が人質を処刑したというデマを流した。イスラエル軍による自国民の犠牲は人質の証言でも明らかである。

についた者を皆殺しにしただけではないということです。まるでパレスチナ戦士が部屋から部屋を家捜しして、家人を見つけ次第撃ち殺したというような情景があったかのように報道します。そんな単純なものでなく、交戦を含む複雑な事態があったと思います。だからと言って、民間人殺害はなかったと言っているのではありません。それがあったのは事実です。なぜ、そのようなことが起こったのでしょうか。

この疑問を十分に説明することはできませんが、初めてイスラエル領に侵入できたパレスチナ戦士は復讐心に燃えて、これまでの恨みをぶつけるような心理状態になっていたかもしれません。しかし、ハマス軍事部門指導者の戦略目標には、イスラエル軍が公言し実際に行っているような大量虐殺はありませんでした。一部戦士に行き過ぎがあったかもしれませんが、私には分かりません。パレスチナの、そしてパレスチナの軍事的な計画という点で、そこにどんな根拠があるのか、私にはよくわかりません。しかし私としては、戦術的な側面や戦略的、軍事的な目標という点で、多くの正当な疑問があり、理解する必要があると思います。

イスラエル側では、軍、政府、諜報機関上層部は１０・７での諜報機関と軍の失敗に非常に怒っています。軍と諜報機関がちっぽけなハマスに負けたと怒り心頭に達しています。だから、復讐としての徹底的攻撃を含め、デマ作戦でパレスチナを貶めるのです。

パク・ジュヒョン：これはいろいろな要素が絡み合った複雑な問題なのですね。ご説明ありがとうございます。

あなたが『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス』のアダム・シャッツ（Adam Shatz）の記事への反論を『モンドワイス』に書きましたね。最後にこの点について議論したいと思います。シャッツは１０・７に対する西側左翼とリベラルの反応を批判的に分析したのですが、あなたはその分析におけるいくつかの問題点を指摘しました。それはパレスチナ人のレジスタンスの解釈に関する点で、シャッツの論文のタイトルが「復讐の病理」（Vengeful Pathologies）であるのに対して、あなたの文のタイトルが「希望を秘めた病理」(Hopeful Pathologies)である点によく表れています。私はこの両論文を読むことをリスナーに勧めます。今ここで、その内容を全部言ってくれとは言いませんが、このインタビューの締め括りとして、停戦と占領の終結を求める米国や西側の左派やリベラルに対して、何かコメントをお願いします。

アブダルジャワド・オマール：確かに、この件は触れる必要があるものの１つだと思います。また、タブーとして作られた話題は、触れることができない不可侵のものとして作られていると思います。なぜなら、触れると怖いものだからです。パレスチナ人の抵抗に賛成するにしろ、非難するにしろ、そこから考え始めるべきです。私の言うことを信じてほしいのですが、パレスチナ社会の中でも全部が全部、武装抵抗を支持しているわけではありません。PA やファタハのように武装抵抗を批判する勢力もありますし、多様な主張があって、批判もあります。イデオロギー的思想的な論争があり、落とし穴を含んだ不安定で微妙な状況にあるのです。私にとっては、これは微妙なニュアンスの問題だと思いますが、私が驚いているのは、西側の主流派がパレスチナのあらゆる抵抗グループを ISIS などの狂信的イスラム主義と混同していることです。

パレスチナの抵抗グループと ISIS などとは文脈が全く異なっているのです。抵抗グループは様々なイデオロギー的背景をもっているので、グループの中には保守反動派やイスラム主義者もいるでしょうが、民衆は彼らのレジスタンスを支持しています。何故なら、民衆はそこに希望を見るからです。占領という構造的暴力が日々命を奪い、土地を奪っていく状況から脱出する希望を見出すからです。パレスチナ人にとって武装抵抗は希望を秘めた病理基準なのであって、それが今とは異なる世界へ向かう道を見せるからです。西側では、保守派は言うまでもなく、左翼やリベラルにあってもこの点に関しては保守的で状況が理解されていません。彼らはどのような立場に立っているのでしょうか。

レジスタンスはパレスチナ人民だけに支持されているのでしょうか。アラブ世界の民衆もパレスチナの武装抵抗を正当な権利と見ているのは、何故でしょうか。全員とは言いませんが、圧倒的多

数のアラブ人がレジスタンスを支持して歓迎しているのです。何故でしょう。それは西洋嫌悪や反ユダヤ主義レイシズムからではありません。それらは意図的に作られている連想にすぎません。パレスチナ側には苦痛とトラウマの歴史があります。その一方で希望もあります。アラブ民衆にとって、ガザという牢獄を脱出する闘いは、文字通り圧政からの脱出、とりわけ大国支配からの脱出を意味し、新しい世界、新しい現実への道を示しているからです。民衆を支配し、生活と経済をコントロールする外国の鎖から脱し、自立・自治という希望を暗示しているからです。

つまり、レジスタンスには希望があるのです。奇妙で実に皮肉なことに、パレスチナ人の抵抗の動機が希望であることを認めるのは、こともあろうに極右の入植者たちなのです。彼らの代表であり、パレスチナ人の民族浄化という決定的計画を打ち出したベザレル・スモトリッチ（Bezalel Smotrich）は、パレスチナ人が絶望から、やけくそになって闘っているとか、土地を奪われたから闘うのでなく、「彼らは希望を持って戦っている」と言いました。もちろん、彼のいう「希望」とはイスラエルを破壊し、パレスチナからユダヤ人の存在を消滅させるという希望です。彼はそのように抵抗運動を認識しています。パレスチナ人はそんなことを考えていないのに[11]。しかし、彼の認識内容はここでは重要ではありません。ここで指摘したいのは、彼が「征服され、服従を余儀なくされている人々がたとえ僅かでも希望の光を求めている」ということを認めたことです。その希望の光を武装抵抗の中に、あるいは武装抵抗を試みることの中に見出したのです。しかし、もう一度言いますが、パレスチナ人のすべてが武装抵抗に同意しているわけではありません。１０・７アル・アクサ洪水に関する批判も多くパレスチナ人の中にあります。

武装抵抗を支持している人々も、それをやみくもに支持し、あるいは物神崇拝しているわけではありません。武装抵抗、レジスタンスのやり方に関してもパレスチナ人の間では活発な議論があります。それから、あなたのリスナーに是非知ってもらいたいのは、パレスチナ人が繰り返し非暴力的方法で抵抗運動を行ってきたことです。それらはすべて残忍な暴力で仕返しを受けました。ガザで典型的なのは２０１８年から２０１９年にかけて行われた帰還大行進（the great march of return）というガザ国境での抗議デモです。あのとき多くの人々、幼い子どもまでがイスラエル兵によって狙撃され、足を失ったり、殺されたりしました。非武装であっても殺されるのです。そういう訳だから、残酷さ、とりわけ暴力の残酷さから暴力抵抗が生じるのです。

私たちは武装闘争の是非やあり方に関する議論を避けるべきではないと思っていますが、しかし、同時に現実問題としては、主流派の言説においてハマスの戦略の議論が唯一許されているのは、ハマスを殲滅させたい人たち、ワシントンDCの政治家やシンクタンクや軍人など、私たちに敵対する人々なのです。

左派やリベラルの間にはほとんど議論がありません。彼らは恐れているからです。武装抵抗を大目にみるとか断固否定するというのではなく、そういうことを議論すれば過激派というレッテルを貼られるという恐怖なのです。西側世界には、パレスチナを話題にすること自体がテロリスト支持者とか反ユダヤ主義者などのレッテルを貼られる風潮があります。親パレスチナと見られたら、民間人殺害や幼児の首はねを支持する人間と見られるのです。左翼やパレスチナ支援の活動家が実際に起きていることを活発に議論しないことは、よく言っても知的な怠慢にすぎないのです。アダム・シャッツ（Adam Shatz）はそれをやろうとしたのですが、それを暗い色調で行ったのが問題なのです。パレスチナ戦士の行動を道徳的に非難し、民間人殺害に故意に目をつぶる左翼を批判しただけでなく、歴史的類推を駆使して、西洋世界でファシズムの台頭によって悪化した状況を語るのです。彼は解放の夢でなく、ファシズムへ向かう悪夢を語るのです。しかし、悪夢だけではありません。悪夢と夢の両方が内包されています。だから私は反論を書いたのです。悪夢的側面と夢的

---

[11] イギリスによる帝国主義的支配の時代において、どんどんパレスチナに入ってくるユダヤ人移民の波に、「ユダヤ人を海に突き落とせ」という民族主義的反応があったのは事実だが、すぐにパレスチナ人は「シオニストを除くユダヤ人と共存する」路線を構築した。

側面の両方を見て、事態におけるダイナミクスの複雑性を理解すべきだと書いたのです。それに、パレスチナ武装レジスタンスとイスラエルの戦闘の歴史は長く、１０・７で始まったわけではないのです。戦術や作戦、戦闘を通して何を語り合ったのかを見るべきです。もっと重要な視点を持つべきなのです。「ここにはパレスチナ人の抵抗という倫理的な問題があり、そこには対処しなければならない道徳的な問題があります。なぜもっと他のことをしないのですか？」と言いたいのです。

　しかし、そのような取り組みが行われているとは思えません。そして、それより問題だと思うのは、パレスチナに関する議論を極端に政治化し、アンタッチャブルな話題としてタブー化している米国の風潮です。パレスチナを語ると周りから警戒され、当局や当局と繋がる親イスラエル・ロビーから恫喝され、沈黙させられる、新しいマッカーシズムが台頭していることです。

パク・ジュヒョン：素晴らしい説明をありがとうございました。リスナーがあなたの意見にアクセスしたい場合はどうすればよいのですか。
アブダルジャワド・オマール：ツイッターに書いていますし、モンドワイスや電子インティファーダに投稿しています。それらで数日後には私の新しく書いた論説を見つけることができるでしょう。
パク・ジュヒョン：それは素晴らしいですね。本日はありがとうございました。